

## 第60号 「改革」

ここ数年、「働き方改革」という言葉をよく耳にします。学校の教育活動の一環である部活動についても、「部活動ガイドライン」に則った計画と実施が求められています。私が理事長を務める島根県吹奏楽連盟においても、どのように効果的な練習を行うべきかを組織として研究していかなければならないと感じています。

この「働き方改革」について、最近では長時間労働の抑制としての数字ばかりが話題になっている気がしますが、そもそも「働き方改革」が叫ばれるようになったのは、少子高齢化に伴う日本の構造的変化が要因です。2025年には65歳以上が人口の3割、2060年には4割を超え、生産年齢人口（15～65歳）が総人口の半数程度に低下するという数字が出ています。50年後には、現役世代1人で高齢者1人を支える社会が来るとも言われています。このような超高齢化社会を迎えるにあたり、女性や若者そして高齢者も含めた様々な人の労働力が貴重なものとなります。その労働力確保のために、プライベートと仕事を両立できる多様な働き方を社会全体で推進する必要があります。さらに、人工知能やロボットの技術進歩に伴う産業構造の変化、また、医療の進歩による「人生100年時代」の到来への対応も必要です。政府は、「働き方改革」を一億総活躍社会実現に向けたチャレンジと位置付けています。

さて、我々教職員の「働き方改革」も声高に叫ばれていますが、学校の改革としては、教師の「教え方改革」「伝え方改革」と、生徒の「学び方改革」「聞き方改革」が最も重要だと私は捉えています。教師は生徒に伝わる授業を模索し続ける。生徒は自分の人生を歩むために自ら学ぶ意識を持ち続ける。お互いの改革が合致したとき、学校のさらなる推進力になると考えます。

予測不能な社会を生きていく若者たちだからこそ、「やったことがないからできない」ではなく、「辛かったけど何とかできた」という経験をたくさん積み、自分らしい生き方と自分の幸せを探求し続けてくれることを心より願います。

私も校長として、「学校経営改革」に取り組み続けています。組織として大切なことは、状況把握・計画・実践・評価・改善のいわゆるR-PDCAサイクルを常に意識しながら仕事に取り組むことです。そして組織を形成する一人一人は、常に自分の人生を模索し続ける意識が大切だと考えます。

今の皆さんにとって取り組むべき「改革」とは何ですか。